

《書評》

川口幸大・堀江未央（編）『中国の国内移動—— 内なる他者との邂逅』

京都：京都大学学術出版会、2020 年、vi + 311 頁

朴 歓*

KAWAGUCHI Yukihiro and HORIE Mio (eds.) *Internal Migration in China: Encounter with Inner Others*, Kyoto: Kyoto University Press, 2020, vi + 311p.

PIAO Huan

本書は、中国におけるさまざまな人の移動に焦点を当て、移動が中国社会に何をもたらしたかについて検討した論文集である。本書は、8名の文化人類学専門の執筆者が2016年から進めてきた共同研究の成果である。それぞれ10～20年に亘るフィールドワークを行い、調査地における人の移動という要素の顕著化という問題意識を共有している。

本書は、中国の国内移動、および移動によって生じた数々の状況そのものも国家政策によって大きく規定され、政治的な主題となっていることを指摘し、そのような中国の特色を踏まえ、それが人々と社会に何をもたらしているのか、そして私たちはそこから何を知り得ることができるのかを(p. 10)、次の三つの視点から考えようとした。①移動が生んだコンタクト・ゾーンにおける社会関係とはいかなるものか、②移動は何を広め流行らせているか、③移動によってエスニシティと他者像はいかに再編されているか。本書は以上の三つの視点を掲げた3部で構成される。序章「国内移動をいま論じる意味：中国と日本」(川口幸大・堀江未央)では、本書の視点と構成、議論の枠組みを示す。以下、序章に続く各章の概要を紹介する。

第I部「移動が生んだコンタクト・ゾーンにおける社会関係とはいかなるものか」には三つの論文が収録されている。「非対称的な権力関係の中で異なる背景にあった文化が出会い、衝突し、

*東北大学大学院環境科学研究科博士課程後期

『東北アジア研究』27号(2023年)、137-142頁、doi: <http://doi.org/10.50974/00136714>

© 2023 PIAO Huan

本著作物は、特に記載がない限り、クリエイティブ・コモンズ 表示 4.0 国際 (CC BY 4.0) ライセンスの下で提供されています。 <https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/deed.ja>



格闘する社会空間」(p. 11)としてメアリー・ブラットが提示した「コンタクト・ゾーン」の概念を3名の著者が援用し、次の三つの問いに答えようとした。①コミュニティはそもそも「一元的」なものなのか、②移住者たちが暮らすようになったコミュニティを構成するのは彼らと地元民の二者だけなのだろうか、③人は、他者化したままでは交わりや理解には至らないのだろうか(p. 12)。以下の三つの章では、各著者がその回答を示す。

第1章「あんたがおれの百度だ：珠江デルタの「本地人」と「外地人」」(川口幸大)は、広東省珠江デルタの村落部に暮らす地元の人びとと出稼ぎ移住者たちの関係性を、本地人と外地人という二項対立的に捉える見方から離れ、より複数の層と境界からなるつながりの諸相として捉え直し、その特質を指摘する。広東省珠江デルタの村落部は、圧倒的多数を占める「宗族」(父系同族集団)の一員としての地元の人びとのほか、「宗族」以外から見れば外側の関係にある村の少数の他姓の人びとから、元水上生活者の人びと、1980年以降から出現した「港澳」(1949年以前から香港やマカオに渡り、この時期に「帰郷」して経済活動を行うようになった人びと)、「台商」(台湾から来て経済活動行う人びと)まで、その村落社会における他者の存在が「二元的」には捉えられない複数の層を成していた。その中で新たに登場したもう一つの他者が出稼ぎ者の「外地人」であった。川口は、具体的な人物の日常におけるコンタクト・ゾーン(くじ店、バー、飲食店)に着目して、外地人と本地人の関係性と、そこに設けられた境界が絶えず流動し変化し続けてきた状況を記述する。過度に親密でもなければ、かといって必要最低限のこと以外は没交渉というほど疎遠でもない彼らの付き合いのありようは「コミュニティの二元性や外地人と本地人の力関係が決して固定的ではない」(p. 52)ことを示唆する。

第2章「都市を出る人、都市に来る人・戻る人：広東省の地方都市汕尾の事例から」(稲澤努)は、広東省の地方都市汕尾を舞台に、汕尾の地元人、香港帰りの広東語話者、内陸からの出稼ぎ労働者という三者関係に注目して議論を展開する。歴史的に香港との結びつきが強い街である汕尾は、地元人と出稼ぎ労働者の対比という二元的な構図ではなく、香港帰りの広東語話者が加わる三者が存在していることから、より複雑な様相を呈していた。21世紀初頭まで、地元人と出稼ぎ労働者の「二元社区」と呼ばれるような状況があることが指摘されていた汕尾は、十数年の時を経た現在は、「長期に亘る相互の接触、双方の経済状況の変化や国家の普通話普及政策の浸透」(p. 84)とともに、結婚、食、言語など、その社会文化において変化が見られるようになった。稲澤は複数の個人の事例を取り上げ、若年層を中心にこれまで汕尾では忌避されていた「出稼ぎ者の食べ物」が受け入れられていること、「地元が上」「出稼ぎ者が下」(p. 86)であった関係性に、普通話の普及に伴って変化が生じていることなど、変わりつつある汕尾の様相を示し、コンタクト・ゾーンにおける彼らの関係性の変化を指摘する。

第3章「出稼ぎ先は「小さな国連」：浙江省義烏市に暮らすムスリムたち」(奈良雅史)では、国際的な商業都市としての発展とともに、中国内外のムスリムが集まるトランスナショナルな空間となった浙江省義烏市に注目し、多様な人びとが共在する「小さな国連」としての義烏のありかたを検討する。従来、義烏市への中国ムスリムの移動とコミュニティの形成は、経済的要因によ

るものであることを前提として論じられてきた。しかし、リーマン・ショックが起こった 2008 年以降は、経済状況の悪化により義烏は出稼ぎ先として必ずしも経済的成功に結びつく場所ではなくなった。それゆえ、中国ムスリムの義烏への移動は「経済的動機のみには還元しえない」(p. 94)。本章は「小さな国連」としての義烏のありかたを手がかりとして、経済的動機のみには還元しえない中国ムスリムの移動を論じる。奈良は、「小さな国連」である義烏が表す都市性、すなわち、「大都市ほど経済発展してはいないが、生活環境は悪くないという都市の規模の小ささ、さらに経済活動が前景化することで両立される匿名性と多様性」(p. 120)を義烏の特徴として提示し、そのような「義烏の都市的な特徴が、必ずしも経済的成功には結びつかない義烏への移住およびそこでの生活を動機付けている」(p. 120)ことを指摘する。その上で、義烏の都市性によって可能となるさまざまな境界を持つ他者との共在とそのありかたを描き出す。

第Ⅱ部「移動は何を広め流行らせているか」は二つの論文で構成され、「二重の越境」(p. 15)を経験する少数民族の農村から都市への移動に焦点を当てている。これまで指摘されてきた少数民族における移動先での独自のネットワークの構築という展開を背景とし、ここでは、当事者たちが漢民族の世界での経験をどのように意味付け、何をたずさえて戻って来るのかが検討される。

第 4 章「移動の危険に対処する呪術：雲南ラフ男たちと出稼ぎ」(堀江未央)は、中国雲南省のラフ族の出稼ぎ移動とともに生まれた「口功」という新しい呪術的实践に着目し、既存のラフの移動・呪物との連続性と、そのコミカルさの具体的な様相を描き出す。それらを通して、現代中国の出稼ぎ労働の不確実性を描くとともに、新たに登場した「出稼ぎ者」という「民俗カテゴリ」(p. 132)がもたらす変化が検討される。歴史的に移動生活を行なってきたラフ社会は、現代中国における人口管理と定住政策を背景とし、1980 年以降、「一方での定住化と一方での流動化」という「周回移動としての出稼ぎ労働」(p. 138)を経験するようになった。安全な村落と危険な外界という二分法的空間を有していたラフ社会において、出稼ぎは外界で経験する異文化接触とそこで出会う危険を意味するものであった。そのなかで、出稼ぎ移動とともに生まれた新しい呪術である口功は、外界の武勇伝として語られるが、それは必ずしも経済的成功に結びつかない経済状況の不確実性によるコミカルさを持っている。口功はラフの若者たちが外界の荒波を乗り越えるためのツールとして発達し、「外界への憧れを喚起し、さらなる出稼ぎ者を生み出すような効果を持っている」(p. 158)。堀江は、そのように、村外での苦難の経験と村内に持ち帰るイメージとの境界に立たされる新たな社会カテゴリを生きる出稼ぎ者たちの姿を、口功という呪術的实践のなかで照らし出す。

第 5 章「移動が生み出すトランス・エスニックな子ども服：雲南省から貴州省へ流通するモン／ミャオ族衣装と民族間関係」(宮脇千絵)は、モン(ミャオ族)の衣装を対象に、ものの移動に着目して議論を展開し、人の移動に伴う衣装の流通がエスニシティを示す「民族衣装」に与える影響を考察した論考である。改革开放政策以降、中国では、政治経済的要因が絡み合いながら、エスニシティの結びつきを強調する「民族衣装」の形成が促進されてきた。そのなかで、エスニック・シンボルとして表象されるのは多くが大人の「民族衣装」であった。一方、既製のモン衣装の中

国国内への流通とともに、「民族集団の境界線のはざまに存在しているかのような」(p. 164) トランス・エスニックな子ども服が市場で見られるようになった。宮脇は、具体的な事例を通して、モン衣装の中国国内への流通が、エスニシティの共有や民族アイデンティティの強化という機能を担っていることを明らかにし、その上で、新たに市場に登場したトランス・エスニックな子ども服の流通が民族集団間の境界を揺るがす存在となっている実態を指摘する。

第Ⅲ部「移動によってエスニシティと他者像はいかに再編されているか」は三つの論文で構成され、人の移動による他者像／自己像の構築・再編や、場所イメージの再編のありかたが論じられる。

第6章「出稼ぎに行くのは甲斐性のない人：モンゴル人の移動と生活基盤」(包双月)では、漢人の移住に伴って変容する中国内モンゴル自治区東部のモンゴル人社会を事例とし、他者との接触から生じる他者像／自己像が構築・再編されていく過程を提示する。「出稼ぎ」はモンゴル人社会で生活基盤「ソーリ」を持たない者としてネガティブに捉えられてきた。しかし、農繁期に日雇い工として働いていた漢人が出稼ぎに行くようになったことと、それによって生じた日雇い工賃金の高騰、また、換金作物栽培の失敗などの状況に置かれたモンゴル人は、「出稼ぎ」を一つの手段として選択するようになった。一方、出稼ぎ先で経済的に成功する者は少なく、借金の返済ができなくなった人もいる状況で、村で行われていた個人間の貸し借りシステムは「資本主義的システムの定着」(p. 226)によって代替されるようになった。それゆえ、結果としてモンゴル人社会で、「出稼ぎ」のネガティブなイメージは更に強化されるようになった。

第7章「『君たちは何をしている人なのか?』：広西三江県におけるマカイ人の定住と地域社会」(黄潔)は、マカイ人(客家)の広西三江県への移住・定住に焦点を当て、長い歳月を経て展開されてきたマカイ人と地元少数民族との関わりについて詳細に取り上げる。明末清初から民国期において、沿海地域の広東・福建から内陸の広西へ移住した客家人は、1950年代初頭の中国政府が行った民族識別によって漢族と認定されたが、地元少数民族からは「マカイ人」と呼ばれている。本章は、マカイ人の末裔と彼らとかかわりを持つ諸集団の人びとの語りを示している。そこでは、マカイ人と少数民族とのかかわりを、長い歴史の中で形成されてきた移住・定住の過程とその背景に結びつけて考察し、両者の相互の接触が商業上のやり取り、通婚、民族籍の選択、文化の受容などのかたちで展開していく諸相と、そのなかで構築・再編されていく他者像の動態を明らかにしている。

第8章「移りゆく『辺境』イメージ：上海から雲南への『支辺』移民の語りを通して」(孫潔)は、中国政府の政治的宣伝スローガンによって上海から雲南へ移住した「支辺移民」を対象に、彼らの故郷と移住先における認識が再編されていく過程を具体的な事例を引きつつ考察した論考である。本章は、1950年代から1960年代に上海から辺境の雲南へ移住した支辺移民を対象に、彼らのライフストーリーの検討を通じて、彼らが時代ごとに体験した「辺境」のイメージが、「辺境」をめぐる特定時期の政治・社会環境や生活状況に密接な関連があることを明らかにする。支辺移民にとって移住先の辺境は、移住当初の1950年代から1960年代中期には「生存と出世を求める

居場所」(p. 280)であった。1979 年末～1980 年代初頭に入ると「政策により定着させられ脱出できない辺境」(p. 284)、故郷と比べて「いつ戦争に巻き込まれるかもわからない危険な地域」(p. 286)という辺境のイメージが形成され、認識されていた。さらに、1990 年代以降には、飛躍的に発達してきた故郷の上海とは対照的な、将来性の見えない「停滞したままの辺境」(p. 286)として認識されるようになった。

終章「境界越しの邂逅」の持つ可能性」(堀江未央)は、本書のまとめ・結論に相当する部分である。本章では、各章で論じられた議論を受けて、中国における国内移動の特徴と、移動がもたらした「他者との邂逅」のありよう、さらには利害に結びつく関係性だけを特権化しない「関係の束」としての「場」(p. 302)という視座が検討される。そのうえで、これまでの議論を総括して「差異と非対称の構造を無化することなく、そのなかで人々の営む、偏見と理解不可能性を含みつつも試みる」(p. 304)新たなコミュニケーションのあり方を結論として提示し、今後の課題とともに本書を締めくくる。

以上、各章の内容を概観した。上述の内容をふまえて、以下に評者が考えた点を述べておきたい。本書は、国家の政策が人の移動を大きく規定することを中国における国内移動の特徴として捉え、人の移動と国家の政策との関わりを新たに見直し、その上で移動を通じて生じる「他者との邂逅の場」(p. 300)に焦点を当て中国における人びとの移動の経験と他者との関わりのあるようを描出した。本書の魅力は、珠江デルタの本地人と外地人の微妙な付き合いのあり方、ラフの呪術と出稼ぎ者の語り、民族集団間の境界を揺るがすトランス・エスニックな子ども服、上海から雲南へ移住した「支辺移民」の辺境イメージの形成・再編など、多様な事例を題材に、中国の移動する人びとの営為とさまざまな関係の具体像を生き生きと描いてみせた点である。こうした人びとのバイタリティ溢れる移動経験は、中国国内移動研究だけではなく、エスニシティ、移民研究など複数の研究視点からみても興味深いものであり、その関係性や多様なありようは人類学的アプローチによって民族誌的に論じることができる。

本書は、テーマである中国の国内移動を規定するものとして、中国特有の戸籍制度を指摘している。現代日本の転居とは大きく異なり、中国では、特有な戸籍制度によって人びとの業種と居住地が規定される。したがって、「個人の移動は制度によって大きく制限される」(p. 6)。こうした戸籍制度による移動の制限にもかかわらず、人はなぜ、移動を繰り返してきたのだろうか。このように、中国国内において顕著化する人の移動という問題意識を共有しながら、本書は議論を展開している。

一方、人の移動は、決して現代の特有な現象ではなく、歴史的な文脈から見ると「中国社会においては、流動することがむしろ常態」[山田 2001 : 39]であったといえる。これまで中国社会における人の移動と国家の政策との関わりは、移住・移動現象の通時的検討から、歴史的連続性を明らかにすることで、国家の政策が果たしている意義の解明や中国社会の特質を探索するなど、さまざまな議論の中で検討されてきた[塚田・瀬川・横山 2001 ; 塚田 2003, 2010]。

そのような議論をふまえて本書は、十数年を経て現れた新しい現象や状況の展開に焦点を当て

た論考を中心としている。本書の意義は、移動を通じた他者とのコンタクトから生じる不確実性に着目して議論を展開したこと、さらにはそれを支える新たな分析視角「関係の束としての場」(p. 302)を提示した点である。農村－都市という二分法、地元人と外地人という二元論への批判、人びとの個別具体的な経験への着目、移動する人びとの主体性や動態性への分析という視角は、本書を貫く研究の視座として提示されている。そのような意味で、本書は、「頑なな構造とグループ、地位と役割のみの研究から、状況と個人、解釈と選択と操作(manipulation)を組織的に採り入れた研究へと移行しつつある」[前山 1996：200]文化人類学の研究の方向をよく示すものとなっている。

その一方で、本書は中国国内の移動に焦点を当てているが、主題として提示されているのは、そのほとんどが中国の南部地域とそこの諸民族集団の事例である。しかし、中国における人の移動は南部地域にとどまらず、東北地域や北部などでも地域的・社会的移動が頻繁に行われている。それゆえ今後は、中国における地域・諸民族集団を広く対象として包摂し、諸事例を比較検討することによって、中国全体を見渡したうえでの議論を展開することも可能になるだろう。

移動に対して厳しい制限が課せられる中国の今の状況で、再びクローズアップされる人びとと政策との絡み合いは、ポストコロナ時代においていかなる展開を見せるのだろうか。本書は、中国における移動が持つ意味に新たな視点を加え、現代中国社会の全体像の解明への糸口となり、さらなる研究への展開を導くことになるだろう。

引用文献

塚田誠之

2003 『民族の移動と文化の動態：中国周縁地域の歴史と現在』東京：風響社。

2010 『中国国境地域の移動と交流：近現代中国の南と北』東京：有志舎。

塚田誠之・瀬川昌久・横山廣子編

2001 『流動する民族：中国南部の移住とエスニシティ』東京：平凡社。

前山隆

1996 『エスニシティとブラジル日系人：文化人類学的研究』東京：御茶の水書房。

山田賢

2001 「移住民の定住化と「宗族」四川省雲陽県涂氏」塚田誠之・瀬川昌久・横山廣子編『流動する民族：中国南部の移住とエスニシティ』東京：平凡社、23-40 頁。